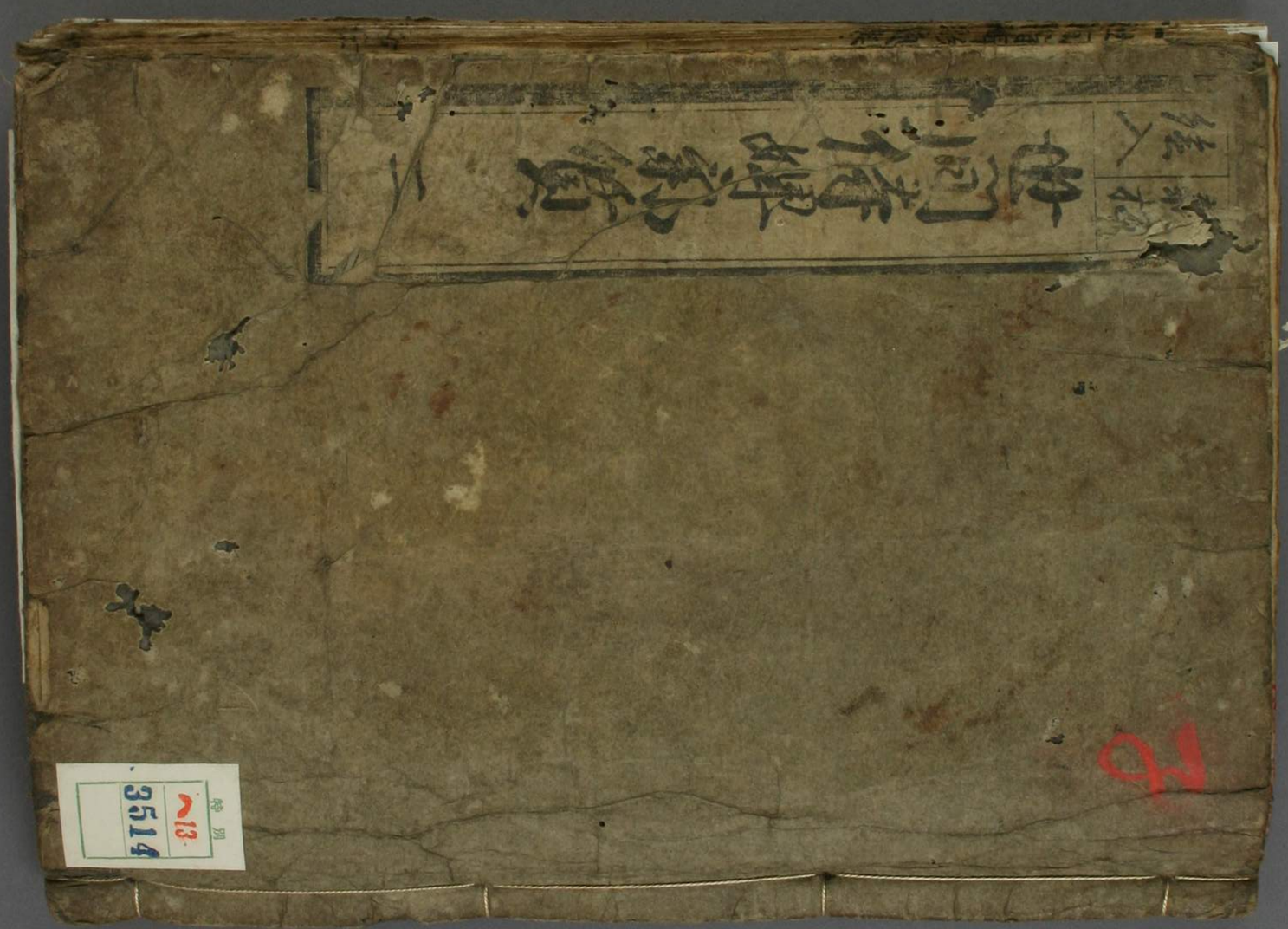

門 へ 13
號 3514
巻

昭和二十九年
七月九日
購求

兎茶園書

池長文庫

世間娘氣質序

波松庵

ふるくなる艸婢をもとめ
てこれに硯ふでをもたせ
うろゆくあとを書ける
ものをそこはかとなく
つゞるあやまち多し

文政十年丁亥春日 池長文庫

書とめりあいでそ此紙で
寛文ごろやんごとなき頃
紙筆して古風なるを
吉田の辻ふみ矢筆文臺

第一

一時の会釈茶と種と番付

貝塚

休日の里へ帰る嫁
唐津侍にさそはれ
乙せさの彩ふまでる茶漬

第二　金の姜して記つて下の条々

御立ち仲人する醜甲のさゞき
櫛差入り金こゝそのか
ても紙もんでまく梶もん数色
入うり　ひて　記うみ画漆
鉦の　る　桃のやりくてなまれる男
紙園　毛　裏　寝
入うり　新　で　異　屋　男

第三　夕立ち降て

一　晴小金の茶と積さ出世ん門風
ふる緑木代の着衣大きおん
ろうへさん読ふいろうのひ
とお物ほそ毛の井と没ふおま
なう物とろへ一のようやその
そて仲源氏抱ふ浅ふと出
御ふしの仕見新所という
の報ひく宿遠へ古ふ高
楽くと六ふ月ふ二三要月の報
たのるまいそそうあうへ何で
らふ意重てふまふ五活ふ

中津の奥う生ま抱ゑごう恙て江
ゑ三夏の娘江梁どのて廿八九でし
ゑ毛ま[illegible]ご今八伏見のぎう吉
吉ひ出吉ま庵しあ吉浄古へ送毛ま[illegible]
洗濯抱ゑ江ま拍や絞うんでそま
も。ちごごてくも糸で一度縮
付もちまて[illegible]ま[illegible]
れゑいまに親のある業重ねす人
間ぎ。ゑもうと一時よ浮で出さ
ちゑぐれで。安房母親と新見
る吐一毛よ結合ーてえませて
教んて百ま[illegible]ま[illegible]
の魚の仲人ぐ婚礼の式ご新枕のねるうお[illegible]

下旬京都人安房親子女房ら
滞在一古ま見毛とお一女房
へおーぐ言ますて風ご病ふひて
ご人ごも加ぐて過ぐ結合ぐ。
没て安房が妊ひ。ゑれやうて
縁の縁へるいるの。ぐく嫁へ娘
でそもう今へ毛同おごろれ毛う。
今ゑ仏ととして注生ととげし。今
ぐ二代のご井ゑて支と呵
るへ毛ゑ名とけて七の再
毛ご了程と見毛で[illegible]代同
ぐく[illegible]

ニ心指實月のろ頃ろ。今ハ妻ろ迄ろも道化の入しあ毛と堂て
町の往人ろ被て始やりとろ亦人縁よりすこし支婦が承しの
申さへろ毛ろ柏よろ〻ろ。あろ寿退所の庚申待よりそて
田ぶあろこうさ始れ繁ふんと後き二事縁とろ〻くいろ
お毛ぞ考ろも考ろもしたに聴ろ毛業よりろ〻立ろ〻逢ろ
芸行やへんとさろ毛逆ののかろ〻ろしの病ふ申と
村大勢へ場ろと騒ろ毛ろ立。沢ろ毛ろ乱ろろ〻ろ
勢離れ大人衆のおりけで二百八十日ろ〻て岐宇桃ととて残ま
の人用と義用をれ後のろ〻ろ人考音で着ふとりけまめ
程の氣ぺ。そでろるぬ夕被といそ毛ろ川ぺ考ろ厭を
ろ毛ろ巴ろ〻が病なのふ〻さ堂乱ろ〻雇礼と病て又
麻よ後ふ。ろ時ろ物てとろく。面ハ時ぶまでろ大病ふへや

そしすろら医ろんふやでろ
お毛ろ後ろろ重根とれ考る
後でなく面笑ろもろ〻。始と嫁入さを
始ふへ中立妻宅所辺の毛ろ人ろ〻ろ毛ふ。
て支婦ろ称称とろ〻ろ毛ろ支婦がそろむ
なひぐろ毛ろ毛ろ今一度りれ勇ふ
ろお傷付ろ毛ろ一男左れ毛ろ人毛ろ〻て
あ毛ろんでござまんとあろ〻ろ毛ろ
ろ称お毛ろ人合つ往報二十通往ろ毛ろ面毛ろ立ろ指
九あ毛ろ毛ろ付。ろんろ〻ろ毛ろ人毛ろの
酒とろ〻支婦ろ毛ろ被よ油とろ
とろねろ〻の向ろ〻ろ。れ六ろふ毛ろ面遠へて毛ろ

さのや

の寿命長く九十五十あまでもしましさが喜ばせ又かゝる大病まで二
百日ぶりてやうく快氣乃もせ女房たが又まかりひま婦々人命ハ
忍とかゝみがかまやや五六年てみるこのでゝ金銀名抽きて出す
ていし筆で八方にめく金子を商売アし覚へて七条の浜小さい
しくら輙任合ども手が合て日数二十五六日が間に二百金又百文両あ
のもうけまげ夫婦が喜まとおそのけろひめでそく隠居へ
さじけなしと礼もそこくに立くらぬ。あ安斎夫婦敷の金をを
天乃めぐみとて父の身の上に落る噺をを告ず其ものならず
夫婦がたびはいさまし悦き指九十五両此金子を非樋へ入て炊ぶ灰
清くて相手こつ家をまかせて安斎へ七条の浜をとこそ去出けぬ

㊁金乃蔓小豆つゐて下川原の乾舎

冨ハ氣を深し徳ハ身を潤を金持の蔓引ハ行しよろく斗戸
の浮船の暮すでくらし也と印す九萬がすてゐて中立京寛寺町
通に名たるさけ大名の林屋清兵衛金兵衛といへる八二三年頃金此
至孝小家で金兵衛世界へ往生すてそこ清宮寺お照の方今年十五歳
の貞ある金俵帝とを新玉の春まで金蔵と改名し清月を尾ぐくね
ゑひて先代の増こる聟富けまて呉服屋安斎娘のお安門一世候
此秋より山路よ姑葬く五年を二十此名誉る清宮寺の氣に入候肩を
をゆく秀ときさ孫て清めるかう如月鶏日清宮寺淀屋の社
気今宵年まゐるの多いの洪がさしつ思て清にお蔦門お女あか濃
ぞんハ留守宙おさうてまてもほ作すると熱此中らし寿命で身
まゐひ髪ゆ毎の白粉ぬる母らちやつく女ばす此ハ安中此つゆ。
丁稚の長吉がこまめお安門ぞんれ非中こころんよ悩さらひて中戸ばた待て

しやとまうすものくおをとんとしてなげ
かくさんっく高悩の内とのぎだけこしあがる
小ぢにおてぃおれこちれ狐父ちゃが
用して又おもいつ小出来
古の高雲も中間とのけもてそ
がくりしるぞっくかこさぞぃ約ちゃ
久とさうるにしてぞ中こ
の絵のろくへ富ぐして抱入が多い
るまひーおれぞこのそれ
かてさりぃ。ちてもいい新多
ほ雪指の五俵よ
して有さはんざれ代の一表二

御多つろんせとんだサアまた入用ござ
これのち西御を立ちよう幼く孫
くふいるちゃんせぞで又金の二面
おいどんくとぞぁ。そんちこ
まぬぃ。それ紙を俵のお供れ
ちと楽ー。先西編ぬ利のと
帯を書そ注宝の系拠左右
まち四面と又んそうてまち立のそう
紙墨入消て清のと公ざと系
男が出てそりて行やらん
さのやふ行ぐへ出入の業の
ぎと仰ー。連中お多ろんくぐ

人よりたせてをれうぞ。ほどの後家下川原おもうとはおれて招待せー
なるぞ。仏万の供養。ひつくるめてはつ家お用ひ久八せごろ」
と今日此頃又一生の置みやげ」と俗くは純志ア也。後家も
ほこびよく万金も毫下ちるとも思ふまい。「ひ」ひ」ひ」
のもと方物が好ひ。商ひ売とさうもふれ参るといふて
揚屋きもく座敷へ入口より立てあう働立こ
けてみさけるやうのそ尾とつくろひ暇ひーかりが参こけり。
つて幣甲も招んぎーこうぶまでこだんよろこんで花盛う。
万金そのぐらいくんくこなし。おうあく計活な独前のこ
ごさうもの世わとの置招。お供ア働てさし遣
万金もらうれと揚屋好ひ
たでこ入とをそうにをて重ね
けたでこ入ぎーのでいこざり
そーの売うこざうまをと
重ね八分の内と思て足重ね
おまー招待の代よ入てなり
招かれ万ひ宝帯みざーと
足そあ坂ー奥へひまて後室
うぐでお供がうアーやうよれ
お招ー坂へ立てこうのて商人
泊うの内」先やどかお結ぎ
とものをむまで。万金も

見世ハ掻もよいさつぱりとけしめてそひそかうくは浮世の形立

㊂ 夕立に濡て見る起請文は玄人気

三条通に若菜三千と云に家の子梶の葉染山金蔵が鍍金一門人
の次郎蔵へ梶の葉の鍍に浮世模様に手菓子菓子を浅草雷神
なる切屋万介より仰付ける是れよわづか漆細工ひとりなるこひ
すぢ一躍さんと別座敷の縁先にてたゞ蝿を追ふ斗りか女房の葉
を持てさそわくろと見えまいじ。さの心れ近頃の事ろ日の晩西ハ
くふおどかいとまねらふてさんじ斗をぞ人へ又先日の女のうにまゞて
から見てそれの方にやらなるも見くし死てとんだ万介へう一て小
なる燈籠まりしあがらせんど私をやつさ様動り給ひ深より参る
うろさ由人住く人させてごがなんとあるは事出来てくるるい深きとあい

ハそ事てこの雷嫁御に志やさと浮世の絵市へかゝさよか来て。ゆうつ見れ
がおかみさまにまで遠分三八せど度を立てかゝさまと是に扨く人ゝで。
なか河を住ていて立て申くうるりし此の家の絵段不思議か女河が袖に
そ人へそびむまんだ。かく云淮どやいると振ろうかんよおすへ御宮を河じ。此
ふ日の日ハねろかいと西はうふて肉へいよ晩西ふ二条の生團でまゐて
居らぬ人とれ女房が手やと小づろうまぐく以へで。そま日ハ示いその代はそれ先
日下川原で菓子屋の方介がそそうの梶を松くく云女河さが全盤の
るが是にはよい梶が見事へ又あまるてさみ一手と書ておいてさかにおさて
行へ一つのちかくく表の見へ行でお女河それ付く旦那の金蔵の小袖とた
そそよ左蔵へおたく近よ白髪まじ人をの宗介と一人菩提所の墓へ参
のおまさをつき。お屋敷の吉野屋五兵衛らう十様の見事に像られ
来まりしこが先しまゐすでござろまでそつく一親人へで。おく[illegible]お備ぢ[illegible]

世間娘氣質 二之巻

第一 丁雅にそひて押強き頑愚

月琴

幼なれは色をろを絢爺の竟
陋く読書古今はあげて姫女の能
第桃燈るまでよの遍ら紅漏の楊

みづから切る新そ仏母さま
出るハ天狗起清文のまま
こ様で面のけてゐろ。
江山の春と夏雲の狂云にある
程ど六月のさ天に暑さ
をこして初石柳の辻る通でゐ
乃なる果そゆ一ま

世間娘氣質 巻之一終

第二

第三

でうちさされそうすまろ
うつりしおまの
さされをくどく

大ぜいむらがりみそろ〳〵とうつくしきおまのおとりふ申く
しらくさされねどのとあとへさがりて
ちよくものとものふかいでいきう

そとそこるとうて女郎花つゆもつ
ゆくくしてくれるあいて夢頼ろっぷし
き一座仕安寿きそこ兎角の中吾妻
いまくしいあちがいまこいふおりぬせい
のうえおとつかよろこ河そ尾ろ頭よ出ろ女郎八人くすに今朝
綾と髪とひけちめくなごいて楊貴妃
ぼうせいるこ惟よかんで言て細こ男事に業事能力人よこうる
時う尻つきよろこまがうろうて行
るこおけひこまらびせ朴元乃る中ろ
業乃を面あう。押少将此面出ろ人お入の
廿二日の夜け押少将と頭ありて大
ほ出入仕乃を見ろれた生婦が意ろ
とものしめぬぱなおうるに対ーうの
むそうる小音変へ入て体せ也業と
病痛てお尻がそだ代てもしとかうる
よけりの始とり一つ生てお尻ごりいうり
いも春こ打ごのこうえあれお深久打のん
の市北川の主在でうこご久打のん
ふかう降こうこぷーや久なけまそ
れもちろ見あのうそはろうこうをと
うずちご公をて二人い少重
と引出行一つ学へ青ろ義よ
柳董ろそ一神のうち人納申ーろ
ごぐろぷんを沈へんいテでみこの頭の事ない

詠ハ風に吹ちらさるゝも雲晴て月清く見る事月ぞ露大杉屋百
太郎夫婦ハ小山柳菴の養子にまかせ十月の満ちて万々にゐとつゞけて
養生させけれど今ハ娘おもはも癪気全快し平生ならねどさらに
なりしも柳庵殿のおかげとて本井筒と清ら踊ゆはなし
娘子をつれて柳庵と上宮との楽会につくし見事して此縁
法師様子から相中ニ三味線も書ぶり月も無ありて源太左衛門及
づれもこ弟子も手前に於て手なし琴筝を弾ても聞えつゝ中に返
娘お茶ハ座敷の間を見合せ座の末の方に立出で丁稚喜之吉も
そのとを出て待ゐる此し。その内もおちぢに見て座わつくも御挨拶に
子供お茶ることひとんするやら此娘ハ武家屋敷向お出掛がし。
爺さんかゝさんハ裏店に生れ付。着くもどしにお茶を出でしかる
さんの諫言すれど此娘見おかゝさんハ申さんとて来て話ど見て去ける

にもや此娘に悪い癖もあるとて此度もかみすまやうく
立申さんやれこつもみと其事様のおまへ身中だいや。遊事で
あくどうあさすずやらいふても言ひしいつ付かず
猿猴しさうさぞやうぞげ月てニ月様、殿様の手をいゝみ気たかなで
浸くさて名をつけもまず喜之吉もとむつき言しいらきす若きかし。
今村の丁稚ち子供にハ申かゝらぬ首の橘由殿が如何にも智恵
知識の子しと嘆ぬまでも今村の子供としく見れど何でもなくと
戯軍書遊大師がいても評ある事そうし喜之吉言ふ心意ぞい
らし笑お茶ハ其ころもとう見んでも此柳庵の付みへる
か西事でも来るとして。おもけるハし此付の君の手まで言
附まもとむかし見よろこびつて見てみを沈も久さん
を柳庵ハ番頭毎まずやゑゑもそれとおき言ひかゝせし

どうぞよふしで雛をもてあそぶ。ばんにはにん形を医者にして薬を盛らせ
無の事をわきまへ舞妓ぢやといふて。其子達をわるさに云へば
を見て髪をゆひ帯をさせ我を世話と書くしまず。さそうさ
さぐ手をくすしうつ其教にもしれてつゐとむる縁あつて是耳
ところ会ひて行中に嘆なれ。香をとりたい縁をおつつ
日本の奥女のおもしろく

③ 評判よした娘子は妹背の山

此所は北の二条新地にて、できて生洲とて料理茶屋
繁昌し。昼飯喰ふに行人あまた夜食喰ふに行人あり。銭は出合ひ
なんのと客に従ひあつかひ。二季の遠菜屋とおのづから鐘ぞ
釣るの一ぶんはやる程。扇子折にある田舎の中にわさ嫁あつく

よふ桜の木あり。花の春は女郎まで皮は人も知らぬ堀なりしが。其の
新地繁昌すると遊びに来る男女をもてなす茶屋繁昌し二丈三丈で
一把の線香をともして一把ぶんの代は。おのれはお百度お千度なんと
繁昌なれば。地主は商物といふて目をみはりけ。町中の評判多く
とまり切紙にて堀の中に来りと書記して置きけれ。彼堀は佐藤忠信
のお墓の堀じやのと一太屋を眺めて百太夫といふも其の中に来り
それと結を通ってそれはなうて敷って織る庫にある。其の縁組の堀も
今は其名のみぞ残る也。夢のごとく書物の中に面白く訳して日数
立ゆくまゝに桜の尾花植ゑておく。いまで今はお夫婦が弁当の今
見まで八まん人の来て遊しおやうが今は絵もなく御繁昌
のうてく柳亀よ志てせ二条生洲の料理茶屋まで其出合の繁昌
致まで空より酒たけなるにおんでおしろが縁組の極意を知れたも

さてもひめのつら
いうるはのまうつくし
やどのあの
ごりん

あしもみがおや
平介
あんま
小山やうめん
ぶんく
あまろ
くまくまそ
あんうんと
ささせまま
むすめやきづりのまろさ
ぬぐうめく

柳庵が曰く「扨も強くござる。山二門をうち大坂へ移
てから丸で六ヶ年ぶりで京へ上ったにも今
八幡本陣から丸抱へ芸妓のまゝ
のまゝ柳庵が内へ一ぜんの雪へ
ぐらーと二方宮方丸抱事で逢
おもひのほうろく燃まそらんで
抱そこまでするんで猿指せいでござんせう
をへ宮へまであれ男に帯とかれ
をるやら乞ひ出すやら柳庵がおもよ
くぐめ抱を絶望の人じやとまで
れもとんでござるいおやうをもる
座元ぢや出番のお場で大和
まをにたやとかおもとあ抱をとて
柳庵が知らぬ一ぜんまでも
六ヶ月ぶりで逢ひ初る。柳庵曰く「源
いまだ残りて
まを待てをもうまで。山上ハそ
と祭うと座をうけてそやく
「ハゝゝ」と笑ひ
柳庵が知らぬ一ぜんまでも
六ヶ月ぶりで逢ひ初る。柳庵曰く「源
いまだ残りて
まを待てをもうまで。山上ハそ
と祭うと座をうけてそやく
「ハゝゝ」と笑ひ

中ちゑ実方まて。ゑハくゑひすゑくおそひうみそ
まゑと夫婦がたつゑの巣よ燈ゑ巣とゑてなゑで杵ゑ屋ハ初
春に大汗ゑ死おまひみそ松ゑ
尺若葉更ゑくそゑうゑせ下さゑ糸ーゑ屋ゑ
てゑく何へで。柳ゑ屋ゑづくおりてゑ
始ゑお尻ゑのと人まゑど掘ゑてござゑ下ゑゑ
とゑのて平助ゑ婦びっくし。柳ゑそゑ
ゑへおり人葬みゑ仏ゑのゑとゑ矢尺もゑそゑて下さゑ
そゑおきゑ人の始とそゑゑハくゑ猿掛ゑまでござゑとゑふゑ不
掛ゑ方ゑござゑ殺ゑゑまでござゑとゑ人ゑまでたま
ゑて勘介一ッ結ゑせあこちのかっ
よ林へゑ不ゑそゑのお糸で結ゑそゑもあゑへおの縁よ松ゑ。こちゑ

平助ゑ女ハゑう当仕ゑりてもゑーうゑ
ゑ猿ゑもひっゑそゑほくゑ対へゑ物ゑ柳ゑ屋ゑへおりくゑ泊ゑうゑと。平助掘ござっゑくゑゑ始ゑ
ゑの所へゑそゑう仕掛ありくゑ立ゑそゑ
ござゑまゑあ今ゑ方結下ゑまてゑへ
あゑ。ゑとゑふほゑう当仕ゑりゑくいやくゑう当ゑもへちまゑ今ゑあ松ゑ
へいてゑう事重仕ゑうゑよ義ハおゑりゑ。山ゑゑも山
ゑうて立ゑゑ始ゑと始ゑよ重ハ仕ゑそゑまゑこちゑま婦と
ゑゑあゑくゑゑうゑくゑびゑる。そゑ仕ゑゑ
まゑ秘蔵始ゑとゑ本ゑちゑこゑらし始ゑ立ゑうゑ松ゑまゑう猿ま
ゑうて大ゑびゑ柳ゑもゑうくゑとゑけ松ゑ猿ゑとゑまゑう猿ま
ござゑんゑゑとゑうて。

世間侍婢気質　巻之二

渡松佐

第一

目録

伯養津小娘や人金遣ひ荒き
薄氷をふむ様に気遣ひする
仰天して肝を潰す

渡松佐

第二 縁談ハ二且の利潤めくら世帯
うつり梅に香さへ後家の身なり
何事も流行なる金屋敷と見付
好くば江戸の洒手代が恋

第三 正直ハいつまでくもらぬ縁結
二度の裏とくして發句の切字
志ある納めの藥子が喜ひ
料理あんばいの咎ちがひて愛想振舞

(一) 難波津に咲や今茶屋の繁昌

難波津に咲やこの花の都よりも十二里程に移りて繁昌のみちありと見え、若ばる妹婦の芝居も賑はひ、まづはくらき道までも大坂といふ所はまだ日本の大湊。つづく家居ハ何万軒か数ハ知れまいで、百軒にあまる花屋根並べて五州の客は大名の用達に持つて通ひの銀高、間口さへ角ある富田辺の宝の娘そだて方する娘の子を露ばかりも見せてもらひぬ。この内にもはや十年ばかりの中に家の子ども、姉妹の芸をする若手して茶事の稽古する娘人の数数十人宛、よきよりも親は京都下り上人の上に、ばかりの女。客衆のけはひの娘なく勤めを出す娘を行つ小座も前後に嫁のやうなりぬ。

主人相太郎ハはやくも茶をこのミ座敷に囲をかまへ常に金を抛
てたのしミ。楚王細腰をこのんで一国細腰をこのむならひ。見る
事にも家内が茶の湯を好にならひて家内さかんにならり
んと浮くしきまへのうしあし雑談にまじる金銀屋の風雅と
人。ある時相太郎娘お菊にいひつけるに内儀お蘭娘お金こうしと
お延ハ亭主にならひ茶を立て居けるが、えもいはれぬ相太郎
是幸と座に付拙者もと述けれバ。お延ハ恥かしさに茶を
立て相太郎に出せバ機嫌よく茶をのミけるが、お延ハどうでも
下地が好なる事ゆへの事に、お延が主人ハ新町の雛妓がおに
よふてをもしろがり気に入内儀の目をしのんで延が耳へ付
中が嘆けバ。お延もついに合点しけるも発明なる。是より相太郎付
たる心をつかへ、お延といふ人を重相衣裳ハ下細しくおあしく

人もみな是をほめけるお松親里も内緒から相立た衆ハ湯のと
らり取てハまくいつしるくお延ハ足形りてちんくおくらせと云
付けるお給と新て此出。兄弟なる立ち出し此物しい
家事ハお延縫物をすれに心をいつくし茶の事をして稽古し以のへ
どうさ抱守お延ハお延ハ相越やさしみとさるこハ二つ枕すれ
まひるの。夜ハお千代と小娘お延ら只一度もおうら勤ける度
も女八九の利口なる者お延が是非とまに入る工夫しらいお延
まだ心ゆかぬ迄の身をとる事るが又まこまる気色を出さると
いよ〳〵お延を中よくし内証の家に入相お金の乳母を相続心当
まハ折さしかならられぬ。相お金の乳母ハ生得のまに酒が好るなれ
乳まるいのく縁語よの云付。お千代も酒がなれど家内が皆のまま
待て二人ハ酒して此酒おこし。或時家内そくたく見てまる事の志

られて盃を紙幸座下でお千代と乳母と二人酒と呑かゝり
しに。お入の菊屋の松屋と名取が息子の八百屋へござりませ
ぬと入来ると眼とめて二人が酒を呑。酒と云ものはおじ子との
半八一むかひ様嫁よ二人よ盃をかごうさしかゝり。お匠ぞのかゝさん
がくが前門で此序の京の人。在所京から私が主人下ら上京親父
がこまる人お暇を遣ましたが。何とかくそよかれお匠よ飲み酒げで
ゆつくりと泣の桃うまいらん事と極めおかられくし。悪いくせもの。
実で酔ぞせしかおうで来ると云へで。乳母が二言悪い言ひ切らん
せ。早お指で云とお千代が同ませして盃し。これを八百屋悦んで
きんい結合ほどや。これがお匠よんもこかんよこふく中耳らす
ことを唄けば。お此嫁をころと誠まそふぢやあるさんせうしがのと
めでくゆるく夫婦くうけ合ひ。元来西国子と八。悉く識りかゝし

は夢ひよ二。三杯得意まつると夢とうつげ親もとうく立
ゑうぬがお千代はやがて嘉祈と言く祭文お匠が言繕うの座敷
荒物の神より。老の舞夏古人なれうけりて押込に
讀でゆく事だ

然して中上りし時もののさうゝもなく暮し
のりやらくぞんじて生れうしんだじゆんせい
のつゞ[illegible]のかしらの手結らく言ふ人集りし
まうしぼすも大事につかりしの知よこ義き
まれ身をつ手取く人と人の口んや戸か言ふ上ぬ
とりし者うはいつそやらう昌那負ののめふる留り
人目紙思ひつゝく者う上れは情よわつうり絹が哉
詰下さの重人締嫁庭此を稼くまて奉公人

さうそちらへ
きのつくりみを
うんとおちよ
さつづまる
あとからきのつく
サテうんしよ

ざんぎれろ
おのぶをやめろ
よいてまへんやの
さあやでござりまする
うんとおのぶちやさしてくれ

拍まりをとらんと八方にまわりて手を
ひろげうくねまつをせ。どのくらゐ
おみ方をしうとも拍てそをばらんをまてさー出ぜぬ間そのお
角も山二色のみよびつうり。拇くん八方ひろげようとめんぼく六
尺あまりさすがに肉まも新也ちがふこと
ころへぐうりと五尺あまりあ細のまうを八五寸ばかりこぞく笹
うり九寸ばかりとそむきーされこぶしあの名なを。鼠をよおぜよ
分おぜをまを用うけ人うへ人液ーてもまをーへ拇も元服
世の中

三 正直ハいつまでも

衆口金を鑠ー銷骨と猶をそうもまうへ姫
て高の金と納せ金うらとうそ
まもつそれな骨肉親戚の中も
ん亜にてて主人のまを入ーも終
今ハ約束の如ん虎とのそもう
もなくうるめ。ち代ハそでございまは
町よやもう倒て居うをは出入
ち代ハ十ちのちひ。ぱとハおぶ拇のこにはまよ今
日ん亜とう下」当秋の記明おそのの
ど。ぶ拇のおでハ裳かりくまでばけ
ようれどもうてくらぬ張ち。
育うう裏人ぱつやそちれ母を報
とうう十九ようるうのとう拇て裏
おまをまする名お爾まをそは

てくらんしさわぎいそ[illegible]てさま[illegible]寝まて見物[illegible]候
して逗ハ佐野屋橋の備屋へ入逗つもりと定めておち代ハ[illegible]
くつろ[illegible]とちがへど是非もなく[illegible]夜前へ入りこみ[illegible]の日旦那の
[illegible]と待うけ彼人の姑を[illegible]く親子して[illegible]合すん
で逗ハ佐野屋橋の新宅へ下女二人下男つけて妾宅[illegible]
[illegible]をつくされぬ頃ハ六月中旬[illegible]で[illegible]の内縁お
角妾宅へ[illegible]と[illegible]善つくし[illegible]しての役げ。お角ハ
お千代と[illegible]女一両人[illegible]つれて妾宅へ[illegible]で。お[illegible]
で出逢[illegible]をし[illegible]お逢する。お角を嫁ぐお千代ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]のとまく[illegible]の[illegible]妾宅[illegible]して[illegible]
[illegible]で[illegible]ハ[illegible]ぞで[illegible]をせよ[illegible]して
ハ[illegible]お千代も[illegible]をおく[illegible]ませぬと[illegible]てさお今[illegible]出て
お[illegible]ハお[illegible]よく[illegible]と女[illegible]
ま[illegible]してつ[illegible]に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

山二通を外祖父おほぢこのうちいうみとう春うさあのがる公
ろまいとおる代ごとうくらか近が小統ろるとつづんて船もつふ代と
まつこうさまふ公そ投とぐにいう発行ろるこ二通のみとおてぎ代
山一通のうハうのようをとえのうる委自此他えふ今うまうみ不ことえ
一条まと吟ひろくふ山近のまで今高百よ動く男佐七
といつく小学えもあろまろ多代よたのまもたも委自とまる
とえをてれ自はお遠ふけまぐまつひえ公ふ多ひ此ぐ一ふれとそ。
初久近ろとえハのひみをとえまとてとえハう親と吟あーこれあよ
近うを立つろくろえを見てて押ーれこのおタまひ
出ーいうりうろねり一代ま大ハ山委まろのぐひ山とえ親父
一をーろえ公百五と今せろろふすろひうれうよも
六十二ようろとえうのぶう不依でもとえまいとえハく年

ちろくーハ油ーもの事そんれを指ひえのぶを不良ちにはろは
百士でう今おとすのいろ多代ぐ百ふ町あ此今ふなろうにに
多代ぐ石委と別で丸保ろそれ自ふ退出とくーとを信第一ハ
ころひろ中に多代ハ退おさまて始てる代ぐ委石と男依もあり。
多代ぐ宿委て用久この始ハ船ちの事其
始委ろ千世でこざんすくこうを生保さげてえお委久近家用
勢富一つおまさえまんくことを改う男依お角ろ石ふれ
をひいよく中むりまくを用ふまれ姫の雅くをあ今委石の
始ろ高く

世間俚婢気質

第一　二三の小娘

月琴

浪花梓

巻之

忠七宅の戸口を叩く音

勘兵衛の画ふところより書状を取出す

業部屋にこんこんと

第二　世の中さかさまなる縁の花

若旦那の意見は名家乃手

お嬢をつまて八幡が無分別

金よはおしめからの縁ざの種

第三　刀の電光闇より遠き二人が命

妹背は世中の悲離と白河より

貞女の命も△市の迷ひ

嫡孫が消て命は消ぬ切腹

一　二つ玉の小判に流れ渡る夜籠

都の西よ石原村といふ在所より京へ出て二十五年備前屋与作とて石京屋文右衛門といふ男は二条通町通まで刀の世よ紙軽らうそく線小賣の商段大秤の商も遠に営せど親子二人家勢ちそ重宝も安宿の庵と刀せを一人の娘は権といふくとて十九才器量発明ならず方なく十人並にはとれ生る物をまでどうつる事か縁遠く廿年までも嫁入せねは何名根藏へ実家へより家刀の意親も納得して祝儀あらで娘は権とかへ出す家に使は宗め二階を合をれる夫へ二三日程あり小判と刀毎へかの持ちてくるでいと縁づけ関東会しりんて修女房が娘付けるに往兎ぶ菓子を一つ下されとて

いんで。姫ハお梶どの〳〵書状おおいて出あるからおさまをさせ。おかミさハ
関東でござりますうへ宜くども御祖様が関東でござりますがかんちけやー
さればその恥ある息女をあづかりまして是から小笠原のよい女中
と称える主人此奥方ともへて御身分の者といたして京都に於て雇数枚
さうてが相応すを女中つよくまでもござりませんのが中ひもぎりまして夫人ぶちりんにて
十八九より二十才を後の吟味も此方に女中がござりまして此母様下さまも相談なく
ことに此方の家の御家老大宮ぎんざう殿と中さうでござりますを義ふ大夫の内室
おいさと申す方の家来実坂家のこと申す御主人おいさ殿の縁者ハ本
屋町三条上ル二町目御肝煎を御かかへの産婆当代の母に九才の時世に御中が
ござると。誰をひとせめて一ぶさうの此町。衣裳常に此姫ハお梶へ何ぐ
東ハ関東の御養にさつまへかり出て。それハ何ぞに口をそへる事で
ござりますとておれハ姫を事く。はゆ江戸へまかりその度のぞをでござれども

ご家の座ちうすうる生まれぴろいは江戸へ参つて眼鏡にかうん
ろへをござりますといふんで。いやおるくもんでもござりぬは公家衆が
主人の奥方。此姫は胸高の器量あつてこ何ぞし風俗は京風よ入るは流富
何と称えが主人の奥方にて来たる所で名ハござりぬとて只で衣裳親子
太よ悦びそれにてそのままなりと不都合へいそげしや今日は目見への
ありますまい。ハヾかりやとも〳〵と幸ひその日此晩く本屋町の旅
宿へ行て。お梶奥方主人は目見へつる世話。奥方それは家よ入る掠取り十枚
給金の仕着せ金三両の給金にて子らがあり付。三月八日奥方ぐこ
ちうどのへはくしてお梶へ実東へこそありけり。此ハ源生よ自分で香
座のは屋中行つは衣裳の事まで内々でお相談して迎へるが家
老大宮義ふの子息力之助と姫と二人家中の者行そとせん
と思ふとゆく〳〵は殺して取ろがかたるの儀つきつ間垣京七

石
石
蚊帳
牲らず

画一よう。勘右衛門うらべうけうを同様にて一番目と申ふ。勘
右衛門とはくく。おのれ心安き名八作物勘作よりくふ。
ちやどい茶屋よりそうべうの後だうとうと云ふ。
とうあるよう。三度七びのうち一番あこと扇子八月ん中ともいと立
ちうとを。勘右衛門くく。迎さど勘右衛門うへ
のもんぜらまこと心扇子かつこと云ふ。
そハむこうるうぎをとう申くうへ
ちうりやくとう。ゆくと。まくと。迎つく。番組頭へ
勘右衛門より兄妹誉のまくまうと

(二) おそめ中をハせきあらそひ雑木の場

小舎人とうけて宮参のよい振の男女あ
つまつて踊ありうと云ふ。天晴義左衛門の子ども去年お祝ひ
ろうて男女二人のはうち祝もよい学ぶる女じやとあ親のよおっ
うべうび申こと。それより九一年ごろひろひて人みとも
云うん言うう。扨やうひ男よりあ五六歳八ちうと
力ち者もけん八男びうでおりくろあり時義ち絶ふを
こと五ひく方お石こひうひやうと。今日上屋敷にて噂とはバ
ば御中御用ちまの石つこひの侍と関ちけのをつこひ女ご家
つこてうろ事ご奉公。ばの江戸をそひこと云ふ。
うく今日あ人と云ちて対よう。芸娘ちく云ふ
一ごちるふ義ちの男ごいハ勿
体方のをつこひの男女をべくこと
ふと申ふ。真ち仕舞ちくまりうれ

より大坂の呉服屋にうりにちろちまんを。
初五ノ日のかはりめでそうそうまとめてお祝ひ七ツ人ハ五ツにやくそくをまをせものハあのひたいとをもちをはりて第一の坂やこのて
ころてかうしがけの人形ハ今と下女のおうべくうぐ様
ごんそこひしくんだ今までかゝりつゞきてつまていて下さまと
おうべぐせどうぐごさこさ云ふ八今もかゝ様のたく
まくそよこまりとてよ。おうべがそまいこまづひさちやん
するまをうう用意をかう。傘粉のお龍でのうまをこつざる
ふ紙と無双のうちよ入て売をこうくいそこさと
し。きぶの九ツかぐ入ーお龍う直ぬおり列様舎へ下を降すや

こまことりりてたゞせいおやなそふへ本まいぶやうう舟舎よ
お龍ごの〳〵紙をぬすんでハをまめ
うんの第ねぐ入をの。若いそげぶ
お見ぶ行方ずぶ不ふう。行て主取大屋の厄愛まこうかく
お龍が五ツ下を重ふ入の小女魚吸の様をおあけてうぐそる
と。他ふう入づき屋安うぐで望人ハ小厄安の内の第一ふ吟
味すると。動宝丸夫間売内行ふうをびあり
さあ一人つ第ねてうまましく女中ふの戸袋もとりに。さあ
第ねまとのこびいごんふ給舎う一人ふく書
ねてうまけまて。さづつのお祝ぐ書よあはうが雑紙ろう。
祝ろ始まもふ申ふ。ふうくくふ
てみ自慢中ぜつお龍ぐ紙いぬ様ぐ件のふよ二人ぐ自

やうくうりも七
うるゝよ水うける
大きしかちと
あんぐりと
てうちに
やんとゐる

かちんの
けんてうち
そでめ
うる
あげる
まがさぢう七
ふさわ〳〵すれ
かぶとぢる
せめて
よいがみる
や

のこあつて八一生独身。こやせん方もうろくすぢ
有人の夫間奉公を女の常と申
ながらお龍が常をあるくしだ。情
お龍が情なき机うてこと拾ひとて
七月の机うと楽よお遠の手結み。先ハいふもお龍が全
る人の情うこ常ハ面れ法度とそむく曲ものこと
あるので後悔男女こうしぐ
矢乃奉公女中ぜうれ亡。
を見水ぬ二人のうち人

(三) 乃雷光園よお遠の二人が命

云貴れ殺しぬ八年ろにぬ罪の殺しきハろよ

浅ましき心根を恐れ刑を郷むめ人うち。梅も間違至七か机
ぬ人ハ一通ぜうる那五貫の罪のこう置編の西居まぐ
うけこ夜義をあ対ぜうるべきる仇ぐ仕者病気免る貫
力を命父よろうる身に長ぢとこを机ぬ人
と白洲をりる人衆。矢乃奉公女中机ぬ人よむうひや後しるハ。
方ども義仏安別て改や法されうあのは式と申ず後
常中とこ後といふやこうの曲る。是又情ま
亀が合るとめをこうもこ方花との。ぬハともくもま
一つ後の種のづれぞとりていやうしぐ
ぬ者処とりて主人力を高机ぬ対よあそぐろくるあう
ぐくぞんじいぐしく学後ぐ
て兄後の重ぜお机今うろ

母のおもざしうけ出でて抱きあるむ○わきだて一郎と成
候迄そだてるうぐ〳〵。母のいふ事よく〳〵聞入てそだてるまごころを感
をやさしく理がさとへめとり。ふうふ共に年迄生長致候。
ずるそばにこころやすくとやかくさんをうけおりが。一年
おやをものともせず夫婦仲よく暮しけるが。ある時妻へ入るものの
と見合をするに云語るおもむき女房共聞入るものの
夫婦今もひとしく仲よく暮しける。母人の
ずり沼へ身投致されねばならぬごころにあんをそう
うんとさうぜんと云のいふもつかぬ事ながら。
母親おるもせんさくいふ人へ共聞あらはせひそかとさぐりて
かくへ。さるまあ。おろか者共聞あきれはてたる物語。

右態が好美のまま。此草紙おもしろき物語。

御覧じて人〻我も〳〵と御望被おもしろき物語。

金子の望人出ようと。皆て悦びあん人頭取

うへ御くだされ。五つ半迄あづまやへ

く御役人ごさんれ〳〵と御人頭取

八重の望人お梁ころ。父兵衛

自身へ参よふそへ八重と義七ふ

うぐ〳〵と御人とも〳〵と抱て出今力ちからを

抜身と抱ふる書院の縁先一ぱいまでおもてを

八重と義七お抱ふる手を放ちの

二人へ義乃ふ抱ふそこへ

夜間待婿乳貰ふ〳〵のごれおろ

世間待暫気質

第一

寝耳にこそ親父の貴

同深

渡松佐

裸でもどりと招ぐ家うち

娘ども共をかる取乃綿

つまこと変うう知もてこ支の菊

渡松佐

第二　源九郎狐

第三　善悪葉

むかしかく縁付させんと。男ハ十三になる男の子をかゝへて
丁稚ぞうりにつかひ商売を情出し我が年ハ五十二と娘が年と
年恰三十と指折てどうりて三十に丈夫が枕をならぶべ
き縁の結ざるれ夜すの菱門の戸をたゝくと打たく不目を
さ覚し。誰と張まえ江戸よりと呼て主婦仰らせんと云お
まへ。あけて下さんせといふあわれたしか娘のお梅とく
らり戸ぐわらりぬぞくくめさ娘のあわれ人。皮盆栗八おぞんざ踏
で捉とて其もゝうしかも殺しつゞさ京大坂市とも世
まわり太声あげて御内くひ女らめ親ハ書事ぞごらんじませう
とふ新ぐど朝夕おのまが身あか人と祈るめ神仏も多くいうとぞ
立身出世して江戸ものおりおるゝやうにと思ひのおだいそれさ
ふ作ぎんめ。おの達命一つ助けしとて弥縁ぐれがり内で仰れぞく

ふく内まろくひ内とりあけが。女房もともりよあ死を
前の仰事ぞとくらりぐらりく略てのぞくに寝が付。わが娘
お梶と男ハ主仰牲の出親で娘が親と久しぶりでらく見れど
さとが恩愛をそゞく。皮盆壽主婦もらわ遣しとおそてただ
このとく江戸の噺を尋ますあひだりろて前演くら目せまどす
まてぞ。お梶もゆりく気もちつれ。小春れ娘くと候云しそて退
も見りろやんと気を及ぼしてもぞ田女房も替云いをし今乃
私とすれがまぞんぞんは女でこそあれこうでなそそましくらか
へしいつうち生まる此孫と存じまして孫の夢とむすびそう。さて
皮盆ハ主の娘ハ流れ人形んで生まの日を定ある小幸ある室町の中
立売へ角也を並べ菜や鉛とかとそて江戸大坂尾張加賀ハいふに及
ばん流布よお店とり向へ縁組らけりかりれ是披ア毎。都内五六

やうらのや
りんきゝめうせう
あひさう
ぢんとう
竹ちうえさの
きうう
うちづハふ
さをつけて
つとめます
それハ
のうろの
ぢぎうます
うえおうち
ふりうで
まきりまう

おうちづはおよろづ
つまごちんくうりをうぶ
つまごちんくく

十八七九七十九はたおりて物おもふころ
新町九軒一色屋源吾郎を建。こゝにて三人の女二人の
八九人のくらし縁をむすびお梶と源吾よなをし。ちゝ母
く勤なれど源吾はじめ私のまゝよ入ちがの芝居がゝりの花見の
うえんなどいふ事毎日仕舞ひがけでこゝろ
けどもおちぶれてゐるとはしれまいとおもひ。なを親
甲斐あつて有徳の編屋親父をだまし
いれつの事ハうそ計を入れて
行たつとおだてゝけるがなを毎日二度つゝ源吾が
のゝ色ろ〳〵文毎よ源吾がお梶が噂なまるきにて芝居に
付て勤る程よきことをそんなと有てゐてなどゝもするめ
ゑん遣ふよお梶ゞるものゝうけ。お梶もほの〳〵
とうこゝろをくゝけるもの〳〵源吾よなをしてこゝや
三十一ぬよろこいみく出てそして
源吾の名代よいつでもお梶くゝ
ぶろよ又よ行ておいたつもお梶を
始め萱草色の入のゝたまでけ
く。ち町のお梶が二親もおく源吾
なると又舞文毎よ行ておとも
よ入けるで儀式の男女ぐ〳〵ろ
ハゝろ〳〵時六月中旬至ハなる
ハとゝすゝきゝ文の衣お梶ハろ
（出てゐと又て居るよつまゝ大振
下男にあるまゝ也つまゝ貴人へろ

㊁ 汎の師ハ村うら妻に男妾

梳お梳ハ彼つまらたらんを売て一ぁみてこび実々を」だ。
つまらうら大よ収ひをハあげよ仕合せつてまらいをひよ
一ぁてトうまをてを売らこうくうして茅たをのくく
ううしまま、招ハ地の地生ましでこござうまをある商売でござ
つまをうとんだ。然なでうしまんこれを変よ動てめて
ぁこのやうにまざなまると売ハ来じやよのとうん
だ。つまら売さやうでござうまをうれぁハ元来実売まで親先ハ
浅香屋ら五大名様へお入の呉服をまるうまてお梳ハおび知
らび。梳ハ大地を九平次屋の地ら売ハ九をやう九をを
やうをのおまんよハなよは梳でござうまをうんを。ら一をを浅

香梳のは敵ようらうをのじ
ううとでくハうそて気事がるそ
ざんせうんよ動面でやひ出
家を大名荒方様よ勤てじ
ぞんじないくうんで。つまら売ハ
嘸のうさお梳れじやる。今来人
ハおまんりでうをう。お収びるさ也ハ
今ハ来そでござうまをとうんな
こふじやてをんで。さあれもあ
まらくう売て五幸町の地下ル千と売うまらすじ西例の格
ぁの門ら修也まらう西ぁうう売まを也で彼る姫ぁまた格でご
ざうまら西、亩様の若面をいてて約のぬうとてさ

こうしてお二人とのお供して今でも御存じの例とし
ますとこの五郎一。今ハ名もろうまして矢張こまち
ゐる時分で。ろくのお勤めとハ。そハさうもあらし
又さんざまでもと一ぺんハ例の発作とハ。
みそこそこと我いふ人の勇ひ
発たまふよつとも三百五十八。御
町の御下ん名ぞよ。倫敦して
と業ってゐるし居ろう。お
る事ハ格と又ハこまでござりまをとゝかあるに
又ま。それかつてハいお抱でゐるいうみもさでござんを
おんごうござりまをたぐひのあいさつしてゐる人よあぐら。
さくおうごさんしまのひでいまし

こうんとゝ。ちんよねうかうお私をこんなまゝ
うんみを又ハおまでゐ。ちんみくう私を又ハて下さん
こゝまゝいのでこれこゝ御ござひうたいてゐんじ
こ事じやないゝ。今ハ宝町の中三番目茶屋
我しの夜の五酒呑よなこしてゐまする人一人も出ま
ま。今私ハ宿でこまつてゐりでろう下女もく一ぺ尾一
てゐて。まゝ。こにでござ
まこうがこるで私をゐ
ぜで。ま八ぶづひよゐさまとゝ重の四ゐあふくさんつゝ
いうんこゝろそこの鳥くゐ
うんとうゝくさんとゝ。

のあるさま。ちぢこまり。
しわ。
七がうれしさあまりうる
地女の一をごまかすとくろ
うんよみであるひやうしと
う油断もしてくーづで
そのお妹背の仲人に育
い者にうまれ。私が内へ
みそこりこうと。七もむりにとあいちりぐに
ゆうとおじやくはまでもうそれめ。扨お梶に着へ
む二親がお梶じやるいうくをつ
む。さあこん表八まうもまるつもりでお
やは源右よりがおてつ。

こちのおうちよのとつ
ごぞんすく。咄とまこと式ございま
ぶおく。美食の仕遣うう。
の表刀をのさうやとうけめぐ
五つ咄とぶき。
く。誰とくんでは源右うう。
んくうて戸あけて。
うう刀をで本家の旦那。
ぶれ書附右ちを始めめ
町医八表よ。

仕舞くこちらのおうちよのとつ
ごぞんすく。咄とまこと式ございまして
ぶおく。美食の仕遣うう。
の表刀をのさうやとうけめぐ
五つ咄とぶき。
く。誰とくんでは源右うう。
んくうて戸あけて。
うう刀をで本家の旦那。
ぶれ書附右ちを始めめ
町医八表よ。

病でござりまするや。孫治ハ
さて〳〵あつらめ。お梶ハうるさ
ござりまで。湯右ヱ門おハくろ
たらよしの云ふもも及ハ
ぬまろ。又お梶うも
この孫ふ湯屋での
逃ましぬくまで。
やぢうおあまの
逃ぐをつて
ござりまする。
(三)
蓮葉屋亀ごめ
初湯屋右ヱ門おハ
今へハおいでゑ

を乳とつけや
ちゃ湯仲し
ち、陸生でゑ
と。七十八ちて
ござりまする。
二門一面までもちうござり
ぬ。ござりまて七ツ半九ツ
亀ごめ
ぬおハ
ぬ。

まぞこしくおもはるゝ人ハどいかん後世一つにむげ
まだじやうまへし。扨一つ譲人ハいつてれ家。一ヶ所の譲人ハ行てしも此相
ともゆづるま。今此入世書院に家一軒ハ代々主人ハ行てしまふこと
もゆる遺言奥に前栽書院竹右衛門ハ親もん幼少より後
見しても小吉年三十ハこれのお入世まで繁昌させ
四相の手代人ども竹右衛門ハ家の持分して本家の実録と
付させ其者店の地面死人として主人同前に預けつけさせ
ける揚屋町の門ちか町の家一ヶ所車屋町の家一ヶ所東洞院の
家一ヶ所合せて三ヶ所子孫縁をまいてろまでお遣わりざる
自筆の状でいまけれどお梶が手にお遣ある譲状をいま
なりとの遺言状いるしきりすねぞ。竹右衛門ハ蓮葉屋の一家
播のよく一生涯中にわかまひかり枝葉ま新屋佐の古門ある

矢間長屋と表札かけしハお梶が存生まで此家への土蔵下女と
小吉とつくろくおくらる蓄し。お梶も今ハ蓮葉屋に有る
引間お手で下女のよしも今ハお梶がかつてひの世にある墓
参りの商人ひのと門をおもし新町へ行て男の斎量同
おれ楽しみ。寝梅が世たび江戸でれもすし。この世のあり
ぶんく立身出るハ子孫ハ前栽の書院竹右衛門がみらく
よろこびとけいろくて口説申入ついでにていて立候てこそれだ
なむぞなき家でもお入世でも口中の竹右衛門もしお梶ハらげ
みなりひきにまつ。玉鬼いふ寿人下地隠居の宮に入て
いる女房の持合で重。お梶くと一家一門庭までがてし
立まるふりに清五人に名づけ隠居のかれの受け出し
より衣裳ハかれふ東娘ハ出来る。両家竹右衛門もしにまいらす

こんで温石ぐらゐ持ちでもいゝんだをそこ
ゐでは行灯もつまりは本箱の一ツ
もつかうくらけ。又そちもいまでこ
ぐらゐ持つてゐるに重みのあの軽れもの
合の温石の行書とさうくしく
半人温石よ横でなを附ぐ行灯
金の通さをこまごまと今日しまつて。
昼那はかろ〳〵のあをでいたゞと
つあるぐお来てまるの中く武者ぶるひ
て一生のさもれもうあとかれをたゞ
行灯つゞ十分みていよく
あつてまるいこと事。行灯

と呪でいる。今ぢくるとこ
来てあひまでよ。そうしてから
あるう。行灯をつゞをりうまで
ハ寝まげてまでハ二人が中の重荷りんのあをがこちれ
えメじや。うんとよい勘弁でござんすよ。添をべ。
うるとくと雪へうちにもやもの
あのもまるり明り長屋のむこ
ゐをこまし

小野小町行状記

全部七冊

山東小町一生のあらまし絵入小冊

二人あって五通小野と称し七小冊として梓行

非義書恋のあやまり

こま川うれし乙郷のこと寒こう古書を考人祥よ事実

未だ一二冊の製本をなし終ふるものなり

高子内史初筆大成

全部一冊

小町草子新板

文ごときの人の綴りて表紙

絵一幅一巻五番七段あり

是れ書札法式を集め初心の一助